

---

# 幾千ものキスをあなたに

溝部 成

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幾千ものキスをあなたに

### 【Nコード】

N6923Y

### 【作者名】

溝部 成

### 【あらすじ】

「いつか、必ず貴方のもとへかえります」

17世紀、神聖ローマ帝国。

ボヘミアの亡命貴族の娘シセルは、大好きなところ、エルヴィーン・マリアへ手紙を書くのが日課。

ある日、友人と出かけた夜会で、殺人を目撃してから、頭痛がするようになる。それは、自らが封印した過去の記憶と関係があるようなのだが…。

# 1 (前書き)

C r a s t e v i c t u r u m , c r a s d i c i s ,  
P o s t u m e s i m p e r .  
e d i c m i h i , c r a s i s t u d , p o s t u m  
e , q u a n d o v e n i t ?

ひくく滑空する鳥たちの影は馬車を追いこし、なだらかな丘をすべってゆく。

かわいた羽音がする。

丘のへりにそつてのびた細い道を、馬車がすすむ。

その道のほかは、みわたすかぎり、きび色の麦畑がつづいた。遠く空との境まで、かわいたくぼみとなだらかな丘がくりかえす。

やがて、窓の外には木組みの低い屋根の家が点々とあらわれ、体を感じる振動が大きくなった。

街に入ったのだ。

向かいに座った友人のカテリンの首飾りが揺れ、しやりしやりと音を立てた。

シセルはため息をおしころした。

「父に招待状がきたの。一緒に行ってくれない？」

一作日、シセルを訪ねてきたカテリンは、開口一番そう言った。

カテリンの父親は外交官で、先日イスパニアへ赴いた。

招待状には、チエンバロの演奏会であることが記されている。招待主はさる伯夫人で、後援する若い音楽家が腕前を披露するという。あわせてダンスも催されるという。パーティだ。

興味がないと一蹴したシセルに、カテリンは内緒話をするように声をひそめた。

「ファルツの……エリザベートさまがご逗留されているらしいわ」

カテリンの眼鏡の奥の琥珀色の瞳がシセルの顔を映した。シセルは同じ学校に通った頃から、この友人が形而上学に傾倒しているのを覚えていた。

昨年亡くなった高名な形而上学者ルネ・デカルトの献辞にも登場した才媛の動向を、カテリンが逃すはずもない。

シセルに愛読の『哲学原理』の巻頭を開いて差し出した。

Epistola dedicatiaの文頭は、『ボヘミア王、ファルツ伯にして神聖ローマ帝国選帝侯フリードリヒの第1王女エリザベートにささげる』とはじまる。

「わたしたちだけで行くつもり？」

「ええ、他に誰がいるの、」

「小父様には何て」

「黙っていれば、分からないわ」

あなたもよ、とカテリンは微笑んだ。

どうやら、シセルの叔父が留守であることも計算にいれてきたらしい。

「たくさんの公や伯が集まるわ。いつかシセルも王女に会いたいつて言ってたじゃないの、」と興奮を隠しきれないようにささやいた。

「会えないかもしれないわよ」

とシセルは釘をさしたうえで、最後にしぶしぶといったふうに行方を承諾した。

この友人の頼みを断れたためしがない。

カテリンははしゃいだ様子で、どんな服を着るべきかをしきりになやんだ。

清潔であれば、今着ているようなドレスでかまわないだろうとセルはうながしたが、カテリーンは納得しない。

軽い席だとしても、正式な招待状に応じておもむくには、服装にも配慮が必要だと主張した。

普段は自邸から出ることの少ないカテリーンだが、ときおり外交官の家風をほのめかす。

道は城壁のうちへ進み、北から南へ馬車を運んだ。

アカシアの並木を通ると、眼前には対照の棟を2つ連ねた石積み  
の古い邸が現れる。

右翼には地面から這う蔦が絡み合う。

いくらも進まないうちに、邸から腰の曲がった老侍従が姿を現し  
た。彼は、慇懃な態度で馬車のステップから2人が下りるのを待ち、  
邸のシャンデリアの広間へ誘った。

そのパーティの豪華で大規模なことは、シセルたちの予想をはる  
かに上回っていた。

美しく着飾った何十人も人間がひしめく大広間の隅で、いつち  
エンバロが披露されるのかなど尋ねようもない。

どう考えても場違いな場所に紛れ込んでしまった格好だ。

貴婦人達は扇をあおぎ、また口元を覆い、さやさやと会話を楽し  
んでいる。

手元や首元にレースを飾った貴公子たちがその周りを取り巻き、  
蜜蜂のように群がった。

談笑する男女の脇を通るたびに強い香が、鼻孔をつく。

すっかり気後れを覚えてしまった2人は、しばらく肩を縮めてい  
た。

しかし、そんなことで大人しくなってしまうようなカテリーンでは  
ない。

「いいわ。私、少し探してきます」

決然と言い放ってその場を離れたきり、もう1時間になる。

シセルは、独り置いていかれ、人混みを眺めながらあてもない物思いに時間をつぶすのもさすがに疲れ果て、広間を離れた。

天井の高い廊下の壁には、燭台型の壁灯と硝子鏡が交互に並んでいる。

カードほどの大きさの四角い板ガラスを金でつなぎ、縁にも同じ鏡を並べて黄金色の装飾で囲んだ、イタリアの鏡。

そのおもてに、焦げ茶色の髪を肩まで伸ばした、不機嫌な顔の娘が現れては過ぎる。

自分の表情を確認して、余計に居心地悪い。

あまり遠くまで歩いてはカテリンが迷うだろうと思いつながら、扉が開いたままになっている控え屋があったので、一休みさせてもらうつもりで椅子に腰をおろした。

照明のしぼられた小さな部屋の壁には、果物と花瓶の静物画が飾られている。

たっぷり詰め物をした背もたれの高い肘掛け椅子は、緑の巨大な陶器に向かい合っている。

筒型になったネーデルラント製の緑のヒーターだ。

ひとりになって緊張がとぎれると、眠りが足下から忍び寄ってきた。

部屋の静かさとほどよいぬくもりに、椅子の上でまどろんだのはほんの数分のことだったはずだ。

だが、ふと気がつくと、妙に部屋の中が暗い。さっきは点っていた壁の明かりが、いつの間にか消されている。



開けたままにしていた廊下向きのドアも、今は閉ざされているようだ。

誰か、シセルがここにいることに気づかないで、ドアを外から閉めたのだろうか。

扉は分厚い木製だが、新しい物らしく金属のノブも光っている。ずっしりと重い手応えのそれを、回しながら開こうとしたが、動かない。

鍵がかかっている？

シセルは一瞬茫然となった。

両手で力一杯叩いても、外までろくに響くとは思えない。

それに廊下には人影ひとつなかった。といって、この部屋には窓もない。

狭い室内を見回したシセルの眼が小さな光を捉える。

ドアから見て左手の壁に、もう1つドアがあった。

ぴったり閉ざされていると思っていたが、わずかに透いていてそこから隣室の光がもれている。

そして、気づいてみれば低く話し声が聞こえる。

シセルはひかれるように、ドアに近づいた。

細い隙間に顔を寄せてみた。そして、声をのんだ。

純白の布をかけたテーブルの向こうに2人の男が向かい合って、こちらに横顔を見せて立っている。

くつきりと白い鼻の線が、線対称に相似形を描いて浮き上がっている。

2人とも正装で、黒のビロードをまとっている。

だが、それ以外の全ての点で、ふたつの横顔は対照的だった。

右側に立っているのは、ローマの彫像を思わせる青年だ。

細かく縮れたブロンドの髪を額に垂らし、うすい唇をきつくひき結んでいる。

眼窩の奥の眼は険しく、眉間に縦皺が刻まれているのがここから  
もはっきり見えた。

もう1人の男は老人、それも髪は抜け落ち、皮膚の下の筋肉も脂肪も全て失われ、漂白したような皮膚をしている。  
痩せた横顔だ。

卓布の上には、むき出して置かれた薄紅の百合の花束。  
乱暴に扱われたのか、花びらが布の上に幾枚も散り落ちている。  
ぼんやりとその表情をうつす蠟燭と、空のガラス杯が2つ。

燭台は、ふたりの男を淡く照らし出している。  
その仄かな陰影が、フランドル派の室内画を思わせた。

2人は互いの視線を合わせていた。  
どちらかと言えば、眼を怒らせてにらみつけているのは、青年の方だった。

その唇が動く。表情にあるのは、冷やかな怒り。  
あるいは、蔑みめいたものだが、声は柔らかく甘い。  
チュートン語ではない。フランク語でもない。

老人の唇がそれに答えた。  
がさがさとかすれていながら、鼻にかかる声音。  
いずれにしても、シセルには全く聞き取れなかった。

老人の口元に皺が寄る。笑ったらしい。死に神みたい、とシセルは思う。  
彼の腕があがる。うすく骸骨めいた手が、青年の方へ向かってゆるゆると差しのばされる。

突然、理解できない言語の叫びが響いた。

短く鋭くシセルの耳に突き刺さる。青年の声だ。

意味は分からなくとも、そこに込められた怒りの感情だけは聞き取れる。

思わず息をのんだ。何が起きたかは見えていた。

老人がのばした手が、青年の頬にふれ、その手を青年が思いきり振り払ったのだ。

青年は目元を怒りに赤く染め、きつい口調で老人に何か言う。

だが、老人は怒りも驚きもせず、あの死に神めいた薄笑いをうかべたままだ。

うすい唇が動く。聞いている青年の頬はいつそう紅潮する。

彼は突然、身を翻した。

こちらに来るのかと、シセルはあわてて扉から離れ、壁に体をおしつけたが、青年は隣室からそのまま足音も荒く、ドアを開いて廊下へ出て行ってしまう。思わずため息が出た。

多分シセルに気がつかずに、この部屋の明かりを消したのは、ふたりのうちのどちらかだ。

人に聞かれないようにと続き部屋の方も、廊下に通ずるドアを内から閉めておいたのだろう。

自分もどうかしていた。

落ち着いてみれば下りているのは内鍵なことぐらい、すぐに気づけただろうに。

あの青年はもう行ってしまっただろうか。

ここから出るのは老人も立ち去ってからの方が良いだろう。

話の内容は全く分からなかったとは言え、良いことのように思

われなかった。

立ち聞きしてしまったのは、全くの偶然だし、交わされていた会話の意味は一語たりとも理解できなかったのだが、無様な良いわけなど出来ればしたくない。

気づかれずに済むなら、それに越したことはない。

だが、気になるのは今の時間だ。この部屋には時計がない。今頃はカテリンが探しているかも知れない。

もしも先に帰られてしまったら、どうやってここを出れば良いのだろう。

突然、すぐ近くで教会の鐘のような音が鳴り出した。

シセルは心臓が止まりそうになり、大声を上げかけた口を危うく押さえる。何も驚くようなことではない、時計の時鐘だ。隣室に置かれているのだ。

2・・・3・・・、息をつめてその数を数えた。5打って停まる。ほっとした。

パーティが始まってから、まだ2時間しか経っていない。

これなら今のところ、先に帰られてしまう心配はないだろう。でも、いつまでも待っているわけにはいかない。廊下で鉢合わせするだけは避けたいから、老人が隣で落ち着いているようなら、今のうちに。

もう一度ドアの隙間に眼を寄せたシセルは、今度こそあつと声を上げた。老人が床の上にうずくまっている。表情は見えないが、手足が奇妙な形にねじくれて、痙攣しているようだ。

もはや隠れている場合ではない。シセルは扉を開けて飛び込んだ。

「あ、あのつ、だいじょうぶですか」

口をついたのはネーデルラントの言葉。

とつさのことで、フランク語もチュートン語も出てこない。

床に膝をついて、老人を抱き起こそうとした。

強いアルコールの匂いが鼻をつく。

仰向かせた顔からはすっかり、血の気が失せて、陶器が彫像のようだ。そのとき閉じていたまぶたが、いきなり見開いた。

見開かれた目は、赤く充血した。うつろな目がシセルを見つめ、唇が震える。

「マ・・・」

喘ぎがもれる。

「コ、コ、」

集める？それとも耕す？

そう言ったのだろうか。

それとも、ただシセルの耳にそう聞こえたのか。

「サン・グ・・・」

しかし、それは再び痙攣に断ち切られ、瘦せてはいても大柄な体は、シセルの膝から床にもがき落ちる。震える右手の指から、丸い玉のようなものが転げだした。

指輪だ。

記されたラテン語の銘は

『Sic Transsit Gloria Mundi』この世の

栄光はかく移ろう

老人の体はすでに、動かなかった。

「で、それから？」

馬車の座席に座り込んで絹の上着を肩に巻き付けたシセルを、向かいからカテリンはやけに不満げな顔で見つめている。

何に対しても好奇心満々の彼女には、シセル1人が面白い目を見たと考えるのかもしれない。

だが、シセルにしてみれば、到底面白いなどといえる話ではなかった。

「後はあなたも知つてのとおり。行きあつた人に事情を話したら、見知らぬ部屋に連れていかれたわ」

カテリンは横を向いて、不作法にもふん、と鼻を鳴らした。彼女の機嫌は容易なことでは直りそうにない。

「だって貴方つたら、何でもない、としか言わなかったわ。そんな事件があつたなんて」

「ごめんなさい。ほんとにもう、早く帰りたくて」

もちろんいくら聞かれても、見たことの何もかもを話して聞かせたわけではない。

偶然のぞきみた隣の部屋の情景が、フランドルの絵のように見えななどと言えば、カテリンは笑い出すだけだろう。

シセルは目を閉じた。

手足を強ばらせ、目をひきむいたまま倒れている老人。

誰か、とシセルは必死だった。

まさかこんなに簡単に死ぬはずないとは思っけれど、医者と呼ばなくては。

立ち上がろうとすると、両膝がぐくぐくゆれている。

椅子にすがりついて、ようやく身を起こした。

さつき、青年が出て行ったドアを開き、依然人影のない廊下に出て、あたりを見回す。

こちらに向かってくる人影。シセルは手を伸ばしながら、

「ごめんなさい！」

と、呼びとめた。

「どなたか助けていただけますか。こちらに倒れている方がいるのです」

だが、足早にやってきた相手の顔を見て、シセルは危うく声をあげそうになった。

それはさっきの青年だった。

怒りの名残のように暗い褐色の目が、シセルを正面から、というよりは真上から見つめる。

倒れたのが誰か、彼にはすぐに悟ったようだった。

「あなたが見つけてくださったのですか、」

「ええ、今そこを通りかかって」

相手が彼で無かったなら、正直に「隣室にいて、」と言ったかもしれない。

だが、故意ではないにしろ、盗み見のようなことをしてしまった、当の相手にそれを告げる勇気はなかった。

「分かりました。彼はわたしの知り合いなので、すぐに医師を呼び



ましょう。

後ほどご挨拶を申し上げたいので、差し支えなければお名前をお教え願えませんか、」

柔らかな口調でありながら、逆らうことを許さぬ威厳がある。  
シセルは唾をのみこんで、震える声を叱咤して口を動かした。

「アンナ・ルシア・フォン・ハッセンシュタインと申します」

「ハッセンシュタイン……？シレジエンの方ですか。こちらへはご旅行で？」

「……生まれはそうですが、いつもは叔父とネザーラントにおります」  
「ああなるほど。エミグレ（亡命貴族。ここでは宗派に殉じた者、という意味）というわけですね」

愛想よく微笑みながら頷かれて、シセルは内心むっとした。

宗教に不寛容であるという故郷の現実を、再確認させられたように感じた。

「広間までご案内をさせましょう。では、失礼します」

「ええ」

シセルが膝を伸ばしたときにはすでに、青年は脇にいた従僕に合図し、部屋に入ろうとしていた。

彼の前をゆく3人は、連れのようなだった。

1人は、青年よりは背の低い、黒いドレスに包まれた華奢な後ろ姿。もう1人は、若い従者らしき男。

最後の1人の背にシセルは一瞬首をひねった。  
それが、知っている者のように思えたのだ。

「こちらへ、どうぞ」

従僕がシセルをうながし、パーティの喧噪が聞こえる方へ向かって歩き出した。

だが、心臓はそれまで以上に速く、音立てて鳴り続けていた。

あの大きな、たつぷり肉のついた少し丸い背、肩越しに見えた薄くなりかけた白い頭髮、ふっくらした両手。

似ていたのだ、カテリンの父親のホルネリウス・ファン・ディーント。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6923y/>

---

幾千ものキスをあなたに

2011年11月21日10時44分発行